



UEDA

Women's Junior College

上田女子短期大学附属図書館報

みすず

No.47
2020.12

総合文化学科 教授 玉城 司

唐臼山のササの花

上女(上田女子短期大学)は、唐臼山の懐に抱かれている。今年の春、唐臼山にササの花が咲いた。5月20日、ササの花が開花したことを伝える信濃毎日新聞の記事と附属幼稚園の水野園長先生よりのお知らせを地域連携センターの畠山さんから一斉メールでいただいた。

ササの花は、60年から120年に一度しか咲かない。60年後、生きてはいられないから、ぜひとも見たい。そこで、畠山さんに無理をお願いして、唐臼山に登って、花を見た。一度だけでは、もったいないので、翌日はひとりでごっそり見に行った。

稲の穂に似た穂からぶら下がっているのが、ササの花らしい。何と小さな楚々とした花だろう。踏みつぶされても不思議ではない。木漏れ日の中で、ひっそりと咲く花を見ていると、100年前にこの小さな花を見たかもしれないと思われてくる。100年前、私はリスでササの花が実をつけるのをじっと待っていた。

花の傍らには、泥ダンゴが置かれていた。唐臼山の神・ヤマンバ様に子どもたちがささげたものだろう。小さな小さなササの花にとってもうれしい贈り物だ。

今春から、私たちは、コロナ禍から逃れるために「密集・密接・密閉」の三密を避けてきた。が、ササの花は仏教でいう三密「身密(しんみつ)・口密(くみつ)・意密(いみつ)」、つまり「善い行い・善い言葉・善い心」を体現しているような気がしてならない。その花が、唐臼山に咲いたのである。吉兆に違いない。

100年にいっぺんしか花をつけないササを詠んだ和歌や俳句があるだろうか、と歳時記をひっくりかえしててみたが、まったく見つけることができなかった。当然にも、季語にもなっていない。ササの花は、誰にも顧みられることなく、100年の孤独に耐えて、小さな小さな花をつけたのだ。

董程な 小きき人に 生れたし

明治の文豪・夏目漱石の有名な俳句である。漱石はこの文句が好きで、『文鳥』のなかでは「董程な小さい人が、黄金の榎で瑠璃の基石でもつづけ様に敲いている様な気がする」と餌を食む文鳥の微かな音を慈しんでいる。

ササの花は、スミレよりもっと小さな花である。小さな身に、こまやかな言葉、そして小さな愛情を結んで、咲いたササの花。100年後、私は小さな羽虫に生まれ変わって、ササの花を愛でているだろう。

そう言えば、漱石の『夢十夜』の第一夜は、恋人が蘇るのを100年待つという話だった。



ササの花 (撮影：金子ちづる)

Ueda Women's Junior College Library News Misuzu

目次

唐臼山のササの花
自己と、他者と、社会とどう向き合うか ～ウィズ・コロナ時代に『ベスト』をどう読むか～
「漫画から本へ」
絵本の力
「絵本」から学んだこと
登場人物が2人だけの不思議な短編小説
それぞれの楽しみを
上田女子短期大学教員が学生にすすめる本
本学教員の最新刊著作
図書館ニュース
図書館講座

CONTENTS

総合文化学科 教授	玉城 司	1
総合文化学科 専任講師	小池由美子	2
幼児教育学科 専任講師	大塚美奈子	3
幼児教育学科 1年	安藤 春花	4
幼児教育学科 2年	瀧澤 恵	4
総合文化学科 1年	堀内 玉緒	5
総合文化学科 2年	大谷 美穂	5
幼児教育学科 教授	市東 賢二	6
総合文化学科 准教授	増田 榮美	6
		6
		7
		8

自己と、他者と、社会とどう向き合うか ～ウィズ・コロナ時代に『ペスト』をどう読むか～

総合文化学科 専任講師 小池 由美子

『夜と霧』(フランクフル著)は高校時代の必読書です。と、高校時代の教師から言われた。高校3年の秋に大学受験はありつつも、今読まないで必読書を読まないうちに卒業することになってしまう、と憑かれたように読んだのを思い出す。何人かの友人も読んでいて、感想を語り合ったことも思い出す。教師はなぜこの本を薦めたのか? 高校生に何を考えさせたかったのだろう。第2次世界大戦中のユダヤ人強制収容所という極限の不条理下で何が起き、収容された人々はどのように日々を生きたのか…… この強制収容所から奇跡の生還を果たした精神科医フランクフルは、囚人たちが何に絶望し、何に希望を見いだしたかを克明に記した。精神医学が何かは分からない私が考えたことは、「人間の実存とは何か」であった。フランスのサルトルの実存主義が世界中を席卷した残滓がほのかに漂う時代であったからでもあろう。

ひるがえって2020年の日本は、いや世界中は、COVID-19の猛威で不安と恐怖に包まれた。これは19世紀に世界中を震撼させたペストの再来を思わせた。ロック・ダウンされた都市も多くあったが、これは現代によみがえったゲットーではないか? こうした状況が、多くの人にカミュの『ペスト』を手にとらせた。小説の舞台アルジェリアのオランの人々は、はじめは何が起きたのか理解できない。それは、日本人が豪華客船ダイヤモンド・プリンセス号でCOVID-19の患者が発生した時に、傍観者であったことと重なる。カミュは語り手に「この世には、戦争と同じくらいの数のペストがあった。しかも、ペストや戦争がやってきたとき、人々はいつも同じくらい無用意な状態にあった」と語らせてる。

日本では感染者が発生すると、実名が暴かれネットでバッシングされるようになった。学生の感染が報道されると、大学がまるごとバッシングされ教育実習もできなくなってしまった。このような眼に見えない「自粛警察」に恐怖を感じる人もいるだろう。総合文化学科の先生方とは、日本人の精神構造は戦前と変わって

いかなかったことが証明された、という会話もした。この「自粛警察」そのものをペストと置き換えることができるかもしれない。

学生の皆さんも、今年度は新学期早々休校やオンデマンド授業になり、不安な日々を過ごしたことと思う。特に新入生は親元を初めて離れ、これから新たな人間関係をつくって行く時に、不条理にもそれが断たれてしまった経験をした方もいるだろう。2年生も資格の取得や就職活動など、不安に駆られただろう。夏休みを経て後期になり、やっと以前の短大生活を取り戻しつつある今、学生の顔が明るくなり嬉しく思う。さてこの間、私たちは何を学んできただろうか。未曾有の事態に直面した時に、何をよりどころにしてどう判断し、行動するのか。COVID-19の感染拡大が現実世界で起きた今、冷静に自己と向き合うことが問われているのではないだろうか。そしてそれは必然として、他者とどう向き合うかを問っている。『ペスト』の中の登場人物、リウ、タルー、グラン、ランベール、パヌル神父、ゴタールは一人の人間の内面に住むいくつもの顔を表しているのではないだろうか。これ以上はネタバレになるので明かさないが、不条理に直面した時に人間としてどう生きるかは、他者とどう関わり社会とどのように向き合うか、の問い直しになる。不条理は特別なことではなく、日常と隣り合わせである。強く生きることだけが正解でもない。

短大生の必読書として『ペスト』を挙げておきたい。暗い印象を与えてしまったかもしれないが、ウィズ・コロナ時代に希望も見えてくるはずだから…… あなたはどのような希望を見いだすだろうか。それが人間の实存である。

「漫画から本へ」

幼児教育学科 専任講師 大塚 美奈子

私は、小学生の頃から漫画が大好きで、高校まではありとあらゆる漫画を読み漁っていました。ジャンルは多様で「ガラスの仮面」「砂の城」「ベルサイユのばら」等の少女もの、「エースをねらえ」「ドカベン」「タッチ」等の青春もの、「ブラックジャック」「美味しんぼ」等職業ものなど数えきれません(みなさんは知らないかもしれませんが)。きっかけは、スポーツの大会でした。出場までの待ち時間が長く、暇なので同じチームの人と数冊ずつ持ち寄りで交換して読んでいたのが面白くなり、いつかはまってしまいました。一方で、推理小説も大好きでした。江戸川乱歩、アガサ・クリスティ、コナン Doyle、モーリス・ルブラン等も学校の図書館で毎日借りて読んでいました。それ以外は、あまり読みませんでした。図書館の先生に読みたい本を書いたメモを渡して購入してもらったのを覚えています。電車の中で漫画を読んでいる大人を見て、私も大人になっても漫画を読もうと思っていました。

しかし、大学に入ってからサークルやアルバイトが忙しく、漫画や推理小説なども全く読まなくなり、卒業論文に取り組むという時期になってから初めて大学の図書館に足を踏み入れました。本学もそうですが、大学の図書館は静かで落ち着きます。そして、娯楽漫画はありません。私の大学時代も論文を検索したり、関連する専門書籍を調べたり、図書館にいとあつという間に時間は過ぎていきました。さらに、図書館が閉館する時の音楽が好きで、閉館までいることが多かったです。それまでの私は、漫画や推理小説が中心で「スリルや感情変化」を楽しんでいましたが、初めて、大学の図書館で「考える」ということを学びました。「読みながら、調べながら、書きながら考える」それは、人間にとってとても重要なことだと思います。特に海外の論文を読むのに、英語が苦手だった私はかなり苦戦しました。現代は、電子書籍も多くなっていますが、時間が限定されている場合、紙の本の方が記憶に残りやすく、理解力を助けるという知見もあります。紙の本は、握ったり、触ったり、めくったりと指

先の動きがあり、脳に刺激が入ることも分かっています。こんな視点からも図書館は大事な考える場だと思います。本に移行した後は、逆に漫画が読めなくなりました。ある方が「本を一冊書こうとすれば、関連する分野の書籍を100冊は読むことだ」と述べているのを読み、論文を一つ書くにも何冊も読むことが必要なのだと思います、書籍を読み始めました。また、思考には専門分野を深く掘り下げる垂直思考と様々な分野をリンクして新しいことを考え出す水平思考があると言われていますが、私は、これからは水平思考も必要かなと思います、今は様々な分野の本を読むように心がけています。

こうして私は、漫画や推理小説から本へ移行してきました。卒業論文を通じて大学の図書館で「考える」ことを学んでいくうちに本へ移行できていったのだと思います。みなさんにもぜひ、「読んで考える」ということを体験してほしいと思います。それには、大学の図書館がお勧めです。



絵本の力

幼児教育学科1年 安藤 春花

私にとって絵本は、私と母の2人だけの時間を作ってくれる存在でした。私は幼い頃、毎日母に寝る前に絵本を1冊読んでもらっていました。「もう少し待って」となかなか寝る支度をしない私に、母が「今日は何の絵本を読もうか」と声をかけると、私はすぐに寝る支度を整え、絵本を選び布団に入っていました。母を独り占めできる絵本の読み聞かせの時間は、当時の私にとって特別な時間でした。

小さい頃からお気に入りだった絵本は『おいしいのぼうけん』や『めっきらもっきらどおんどん』、〈バムケロシリーズ〉などたくさんありますが、その中でも特に気に入っていた絵本は『かいじゅうたちのいるところ』です。『かいじゅうたちのいるところ』には、文字の無いページがあります。母はいつも静かにゆっくりとページをめくっていましたが、当時の私は絵本には文字が書いてあるものかと思い込んでいたため、一生懸命どこかに何か書いてないかと探していました。どんな音がしているのかな、男の子はどんなことを考えているのかな、これからどうなってしまうのかな、とたくさん想像をし

てから次のページを見るワクワク感が私は大好きでした。

小学生、中学生になり年齢が上がるにつれ絵本を読む機会は減ってしまいましたが、高校生になりいところ産まれると、絵本を読み聞かせしてもらっていた私が、今度は絵本を読み聞かせる立場になりました。あれもこれも読んで欲しいと両手に絵本を持ってくる姿を見ると、1冊では物足りない、もっと読んで欲しいという幼い頃の気持ちを思い出します。

絵本の種類は文字が全く書かれていないものや、仕掛けが施されているものなど様々です。絵本の面白いところは、一度読んで物語の結末を知っているはずなのにページをめくる度に嬉しい気持ちになったり、悲しい気持ちになったり、驚いたりするところだと思います。

絵本を手にする機会が減っている今だからこそ、懐かしい絵本をもう一度読んでみたり、見たことのない絵本を見つけたりする楽しさがあります。皆さんもぜひ幼い頃お気に入りだった絵本をもう一度読んでみてはいかがでしょうか。

「絵本」から学んだこと

幼児教育学科2年 瀧澤 恵

私は読書が好きです。休日は、その時の興味に即した本を探しながら本屋さんに行ったり、カフェで読書したりするのが好きです。子どもの頃は、児童文学や小説などを好んで読んでいました。そこから学年が進むにつれて、ノンフィクションや海外文学、心理学の読み物などを読むようになりました。短大に入学してからは、絵本に親しむ機会が増え、実習で子ども達に読み聞かせをした事で、絵本についてもっと知りたいと思うようになりました。この経験から、年齢に合わせた絵本の選び方、読み方、間に手遊びなど挟みながら子ども達と楽しい時間を共有していく事の面白さを感じました。絵本の読み聞かせの本などを参考に、自分なりに活動を組み立て、先生にご指導頂いた事も貴重な経験になりました。そして、絵本や保育雑誌などにも目を通す機会が増えました。これらの出来事から、自分が様々な事に興味を持って取り組む事で、読書の楽しさや興味も自身の体験と関連づけて捉えることができるのではないかと感じました。

また、私は読書が好きなので、絵本を選ぶ時も文字

の量が多いものを選んでいました。しかし、子どもは絵を見る事で絵本の世界に入り込むので、必ずしも文字が多いものが楽しいわけではありません。読み聞かせをする子どもに合わせて絵本を選ぶ必要がある事を学びました。そして、先生にご指導を頂いたり、授業などで、同級生の読み聞かせを聞く機会があり、更に絵本を選ぶ事や、読み聞かせの仕方への学びにつながりました。

私の好きな絵本に、『ぐるんぱのようちえん』があります。子どもの頃は、ぐるんぱが作る大きなビスケットやピアノを楽しんでいた記憶があります。しかし、大人になってから読み返すと現代人の生きづらさを描いているようにも感じられます。一度読んだ本を時間が経ってから再読すると、自分自身の変化や成長を感じる事が出来ます。この事から、私は子どもが本の世界に興味を持てるように、楽しい読み聞かせができる保育者になりたいです。

登場人物が2人だけの不思議な短編集小説

総合文化学科1年 堀内 玉緒

皆さんは対面授業が自粛されていた間に何をして過ごしていましたか？私は、久しぶりに読書をしました。その中で、『不純文学 1ページで綴られる先輩と私の不思議な物語』という短編集が面白かったので紹介します。この本の主な特徴は2つあります。

1つ目は、本の題名にもある通り、1つのお話がわずか1ページで完結するという点です。しかし、それぞれ違った不思議な世界が舞台になっており、さらに話の展開も早いので、物足りなさは全く感じません。また、一気に引き込まれる書き出しも魅力です。例を挙げると、「先輩が私のペンケースに挽き肉を詰めていた」¹や、「ペット禁止のマンションに住んでいるので、犬の概念を飼い始めた」²など、インパクトがあり続きを読まずにはいられないものが多くあります。そのため、突拍子もない設定の話であっても読みやすいと思います。

2つ目は、人物の心情、風景などの描写が他の小説と比較してかなり少なくなっている点です。そのため、読み手の想像力次第で様々な解釈ができる部分が多い

と思います。また、ページの色が話の内容に合わせて白、グレー、黒に分けられているのも特徴的です。そして、それぞれの物語に付けられたタイトルも興味深い部分です。物語の内容をそのまま表したのもあれば、話を読まないでタイトルの意味が分からないものもあります。このように、読者に考えさせるようなヒントが散りばめられているので、1人で考察するのももちろん、他の人と話し合ってみるのも面白いと思います。

この本で「私」と「先輩」は、本当に様々な世界で生きています。2人の日常を舞台とした物語では、そのやりとりにはほっこりすることが多いです。また、どちらかが相手に執着しているような話もあり、ダークな雰囲気も感じました。いずれにしても、2人はお互いのことを重要な存在だと思っているのがよく分かる物語だと思います。皆さんも現実から少し離れて、「先輩」と「私」が生きる少し不思議な世界な世界を楽しむのも良いのではないのでしょうか。

¹斜線堂有紀, 2019, 73 頁、²同左, 141 頁

それぞれの楽しみを

総合文化学科2年 大谷 美穂

本を読むとき、皆さんはどのような立ち位置から物語を楽しむのでしょうか。登場人物を自分に置き換え、共に一喜一憂しながら物語を追ったり、感情移入したりと、様々な楽しみ方があると思います。

私は、読者という立ち位置を変えずに物語を追います。感情移入するというより、第三者の視点から物語世界を俯瞰する、それが私の本の楽しみ方でした。それゆえに、中高での国語の授業における、結末が読者任せの物語に対し「あなたの考える続きを書け」という課題には苦勞させられました。生徒の自由な発想を求める場だと、わかってはいました。しかし、読者である私が続きを創ってしまえば、主人公の物語が私の物語になってしまうと、当時の私はそんなことを考えていました。

とある機会に本の読み方を人に聞いてみると、「主人公になりきる」「この場面に自分が遭遇したら、どうするか考えて楽しむ」という答えばかりでした。どうして自分は出来ないのだろうと当時は悩みましたが、私の読み方は、ちょうどその頃から興味を持ち始めた創作

活動に役立つと気付きました。現在は、自分なりの読み方で本を楽しんでいます。

感情移入しない分、物語を一つ読むのに掛かる時間や労力が少ないのでしょうか。私はあらゆる分野の本を読んできました。

それほど多くを読んだということではありませんが、図書館で目に留まったタイトルや謳い文句の本は片端から手に取り、数ページ捲っては借りる候補に入れてしまします。さらに気になる内容だと、腰を据えて読み始めてしまうこともあります。そんな時間を過ごすうちに、腕の中の本は片手では持てないほどの冊数に膨れ上がって、泣く泣く数冊を戻し退館した経験も何度かありました。

本の読み方は自由です。図書館の使い方もまた、自由なものでしょう。好きな時に立ち寄り、書架から気になった背表紙を抜き取って表紙を捲るたびに、新たな物語に出会えます。それぞれの楽しみ方で物語を鑑賞し、視点を共有すればまた新たな発見がある。本には、無限の可能性が秘められています。

上田女子短期大学教員が学生にすすめる本



幼児教育学科 教授 市東賢二

①これは読んでおこう

『数学する身体』

森田真生著 新潮文庫 2015

410.4

Mo 66

この本は、このタイトルを本屋で見つけたとき「数学」と「身体」という二つの言葉の繋がりが気になって手にした。考えてみれば身体の中に数字が隠れているともいえるし、数学のプロセスには対話が含まれる。そして、本書の著者である森田氏は数学を通して心を語ろうとしている。「数学」という言葉を懼れずに手にしてみてもいいか？

②

『翻訳語成立事情』

柳父章著 岩波新書 1982

814

Y 51

われわれにもなじみ深い言葉の中には、幕末からの動乱

の時代に翻訳された言葉が多くある。「社会」や「個人」、「自然」や「自由」といった言葉もそうである。本書では翻訳のための言葉の意味をたどるだけではない。「自然」や「自由」などは、もともと日本語としてもあった言葉であるが、この時新たに意味を与えられた言葉でもある。こうした歴史的背景とともに言葉に親しんでみるのはいかがだろうか。

③

『生物から見た世界』

ユクスキュル／クリサート著 日高敏隆・羽田節子訳 岩波文庫 2005

481.78

U 49

この著書は、生物学・生態学の古典であるが、いわゆる分類し種類を明らかにするような生物学ではない。動物の生きる姿をその感覚や行動、知覚と取り巻く環境(環境世界)からとらえ返す。環境に応じて生きる姿は人間においても同様で、環境とのかかわりを考え直すいい機会になるかもしれない。



総合文化学科 准教授 増田榮美

①私の読書の中から

『モモ』

ミヒャエル・エンデ著 岩波書店

943

E 59

児童書として親しまれているので、皆さんも読んだことがあるのではないだろうか。時間泥棒と盗まれた時間を取り戻してくれる女の子の不思議な話である。コロナ禍の混乱した時代にあって、是非とももう一度読んでほしい一冊である。

『モモ』では、「無駄を省く」ことが大事だと信じ、時間を盗まれてしまった人間たちが、「無駄」の部分こそが人生を豊かにするというを完全に見失ってしまっているのがあるが、コロナ禍での私たちの生活に通じるものがあると感じる。

この数か月、「不要不急」という言葉を何度も聞き、無駄な時間を省かれてしまった。確かに、いのちを繋ぐために

は必要なことではあるが、心の豊かさに繋がっている大切な時間でもある。コロナ禍だからといって、無駄な時間を楽しむ心のゆとりを忘れないでほしい。そして、外出がままならない今こそ、その時間を使って読書を楽しみ、心の豊かさとは何かを考えてみてほしい。

②これは読んでおこう

『予想どおりに不合理：行動経済学が明かす「あなたがそれを選ぶわけ」』

ダン・アリエリー著 熊谷淳子翻訳 早川書房

331

A 71

人間の不合理な行動について、心理学と経済学を組み合わせ「現実的な経済活動について研究を行う」というのが行動経済学だ。

経済学と聞くと尻込みする人もいるかもしれないが、行動経済学はとても身近で人間的な学問といえる。学ぶことで日々の生活を改善できる上、マーケティングや商品企画など様々な分野でも活用されているので、是非一度読んでみてほしい。

2020年 本学教員の新刊著作 (今年発行の単独著書・共著書・分担執筆書) 著者の五十音順

・小池由美子 先生

『教師論』

学文社 2020年5月発行 (共著)

374.3

N 34

『長野の子ども白書：地域の中から、子ども・若者の今を考える；2020』

長野の子ども白書編集委員会 2020年5月発行 (共著)

P370.5

N 16

・玉城司 先生

『元禄名家句集略注；上嶋鬼貫篇』

新典社 2020年5月発行 (共著)

911.33

G 34

『土倉文珠堂：奥信濃の宝 鬼無里』

信濃毎日新聞社出版部 2020年11月発行 (共著)

215.2

Ts 28



図書館耐震補強工事を行いました

(令和元年10月7日～令和2年2月)

令和元年度、1階の書庫、AVルーム、ブラウジングルームと2階事務室、閲覧室の一部を対象に、耐震補強工事を行いました。10月に図書館を閉館し、本館に臨時の図書館事務室を設置し、そこで貸出やレファレンスを行いました。12月、まだ工事は継続中でしたが、2階の閲覧室だけでも利用できるように準備を進め、開館しました。そして、2月末にすべての工事が終了しました。

工事終了後は、3月にAVルームおよびブラウジングルーム、今年度の7・8月に1階の書庫の復旧をそれぞれ行いました。1階の書庫は、既存の集密書架が二か所に分けて設置されました。また、中央のスペース

には新しい書架を追加しました。AVルームは四方すべてが白い壁になり、床のマットも張り替えられ、明るく気持ちの良い空間になりました。ブラウジングルームは、入口側のガラス張りだった部分が、一面壁になりました。そして、耐震のため、館内の所々にブレースが施されました。

工事開始から復旧作業終了まで、利用者の皆様にはご迷惑をお掛けいたしました。また、授業の中で復旧作業をお手伝いいただいた司書課程の皆さん、ありがとうございました。

パワーアップした附属図書館をぜひたくさんご利用ください！



集密書架

製本雑誌や紀要、逐次刊行物などの資料があります



書庫1階

新しい書架には絵本や現代の小説などがあります



ブラウジングルーム

東側が白い壁になり、より落ち着ける空間になりました



AVルーム

授業の合間にゆっくり映画鑑賞はいかがですか？

図書館講座

附属図書館では、地域の方々との交流や地域への貢献を目的に、平成28年度から年2回の講座を行っています。ここでは、令和元年度の図書館講座の様子をお伝えします。

● 第1回講座 令和2年1月26日(日)

「学校図書館のイベント紹介 ～読書センター機能を中心に～」

講師：本学総合文化学科専任講師 斎藤直人先生

小中学校での司書の経験をもとに、学校図書館の利用促進のためのイベントやアイデア例の紹介や、学校司書・司書教諭の役割と協同についてお話いただきました。読書活動の一例として、参加者全員でアニメーションを実践。実際に体験してみることで理解が深まり、ご参加くださった現職の司書の皆さんからは、ぜひ現場で取り入れたいとの感想をたくさんいただきました。



● 第2回講座 令和2年2月9日(日)

「抽象画に挑戦!!」

講師：本学幼児教育学科専任講師 吉澤俊先生



「うまい・へたは関係ありません！自分が美しいと思う作品を作りましょう」という先生の言葉に、始めは「抽象画ってどう描けばいいのだろう？」と迷いのあった参加者の皆さんも、筆や指を使ったり、いろいろな模様や色を用いたりして、キャンバスに心のままを表現されていました。個性溢れる素敵な作品の数々に、先生からは絶賛の言葉がたくさん。お子さんから大人の方まで、幅広い年代の方々にお楽しみいただきました。



みすず
第47号

上田女子短期大学附属図書館報
2020.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館・紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-mail：lib@uedawjc.ac.jp

編集後記

a postscript by the editor

図書館からの発信 2020

「みすず」第47号をお届けします。

玉稿をお寄せいただいた方々、そして、お読みくださる皆様に心から感謝申し上げます。

昨年は台風19号の大雨、そして今年は新型コロナウイルス。不安や戸惑う日々が続き、それぞれが大事な予定を変えざるをえなくなりました。しかし、制限された状況や環境にあっても、出来ることや自由はたくさんあることに気づきました。心身の健康を維持しながら、自分の好きなことや楽しいことをひとつでも多く見つけ、実践・実現していきたいです。

図書館は耐震補強工事も無事終わりました。落ち着いた図書館で、知的空間・時間をぜひお過ごしください。

信州・上田は、空気が一番澄み切った季節となりました。まもなく新年を迎えます。

附属図書館長 長田真紀